

## 桃李不言，下自成蹊

石井武比古

日本放射光学会 会長



放射光学会も発足後4年目を迎え、その運営も軌道に乗ってくる反面、出発時にはわからなかったいくつかの問題も見えてくるようになりました。本会がこのまま上昇を続け順調に発展できるか、どこかで挫折するのか、それは偏に今後の運営如何にかかっているように思います。この大事な時に 会長を仰付かり、お引受けはしたものの、責任の重さを痛感しております。会員の皆様に御指導御鞭撻を賜り度く、お願い申し上げます。

私は、今年度は、常に次の三つのことを頭に叩き込んでおこうと思っております。まず第一に、本会の会員数を増加させなくてはならないということです。本会の会員数は、現在、約770名です。学会は原則として会員からの会費によって運営されるものですから、会員数が大きいと、いわゆるスケールメリットがあって、学会の運営はし易くなります。現在の会員数では、定款に定められた諸事業を円滑に行なうには、かなり苦しい状況にあると言わざるを得ません。私の知っている他の学会と比べると、この会員数は、本会が学会としての体裁を保ち得るためのぎりぎりの線ではないでしょうか。

現在、我国における放射光実験施設の利用者は2,500人を下まわらないと思います。それらの共同利用者の中でまだ本会の会員になっていない人は、少くとも潜在的会員であるわけですので、本会を拡大することは原理的に可能であると信じています。そこで、具体的方策や如何にということになりますが、幹事会や評議会に諮ってやっていくことになると思います。しかしながら、実際には、言うは易く行うは難し、であります。言うまでもなく、放射光は科学技術研究の一つの手段に過ぎません。従って、放射光科学の名のもとに集う人々の研究分野は、極めて多岐にわたらざるを得ず、必然的に学際的になります。このことは放射光の有用性を示すものとして結構なことではあるのですが、この学際性の故に、本会の拡大が思うようにまかせない、という側面をもつのだらうと思います。たとえば、研究者が、既に、他の有力学会に属していて、本会に所属することのメリットを計りかねるというようなことです。私は、日本放射光学会はむしろこの学際性を十分にカバーして、専門の異なる多くの研究者に有益な情報を提供し、また、よい討論の場となっていると考えています。この

ことは、学会誌「放射光」を見ていただければわかりますし、本会主催の講習会等を見ていただければわかります。今後検討すべき課題は一般的な広報の仕方のほかに、各共同利用施設の利用者団体との協力関係などがあります。

第二の問題は、光源用加速器に関する加速器学を発展させることです。放射光を用いる研究実験が原子核・高エネルギー実験のパラサイトとして出発した、という歴史的事実の故に、加速器技術の開発は、以前は、原子核・高エネルギーの加速器研究者によってなされてきました。今でも、放射光光源に関する研究成果の一般的な口頭報告の場は日本物理学会の素粒子実験分科会であり、そこには、放射光の利用者は集りません。利用者の意見が開発研究者を啓発し、開発研究者の示す可能性を利用者が実現に向けて努力する、そういうのがあるべき姿なのだろうと思います。そのような場として放射光学会の果す役割は大きいと考えます。素人考えかもしれませんが、光源としての加速器学は、それ自身で、一つの学問分野を形成するに至ったと思います。最近のPFリングの性能向上のためになされた一連の仕事を見ても、世界の各地で行われている高輝度光源開発や小型工業用リングの開発を見ても、このことはよくわかります。今、世界の各地で第三世代の光源の建設が行われていますが、気の早い人は第四世代の光源の話をしています。学問としての加速器研究においては、現時点で、第四世代の光源開発は至極当然の話として存在します。自由電子レーザーの研究もまた然りです。私達は、今、私達が建設しようとする第三世代の光源の設計に用いられている諸原理が40年も前に完成したものであることを思い起すべきであります。

私達がやらねばならない第三番目の課題は真空紫外線・軟X線の高輝度光源計画を促進することです。X線用の大型高輝度光源計画は、高輝度光科学研究センターの発足によって、軌道に乗ったものと見てよいでしょう。菊田惺志氏を中心とした利用者グループの活動も大変活発です。これに対して真空紫外線・軟X線用の高輝度光源計画はなかなか実現しそうにありません。中型光源計画は文字通り提案が林立している感じであり、行政的には、これを取巻く環境は複雑です。私もその中にどっぷりと漬っている訳ですので、立場上、真空紫外線・軟X線用の高輝度光源を言々することは気がひけるのですが、そのことと事の重大さは別の物語であります。分光学的手法によって物質の電子状態を調べることは、極めて重要な研究として、基礎的な物理学・化学の分野にとどまらず、半導体工学、金属工学をはじめ、地球化学、生命科学の分野にまで広く行われています。我国においては、X線の利用研究が先行し、真空紫外線・軟X線の方面への研究投資が薄くしか行われていないため、研究水準が世界の先進国に比べて大きく遅れつつあります。このため、第三世代の中型高輝度光源は、何としても、早急に実現するよう努力する必要があります。本会としても、何らかの行動ができれば、と願っております。

多くのことを一時に考えても非現実的でありましょう。上に述べた三つの願いを実現する

ことは、既にして、容易ならざることです。しっかりと足元を見つめて、一步一步登っていく心構えが大切だと肝に銘じております。本会は、これまで、順調に発展してきました。高良先生、佐々木先生、千川先生という名伯楽があって、本会も千里を駆ける馬となり得たものと思います。はじめにも述べましたように、常に順風満帆とはまいませんのが世の習いです。会員の皆様と共に努力して良い学会を育てていけたらと思っています。桃も李も何も言いませんが、美しい花が咲き、美味しい実が生るので、人々がやって来て、木の下には自然に小径ができる、という話があります。日本放射光学会がそのようになることを念じつつ、この1年を頑張りたいと思います。

